様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１４８

研究課題名（和文）身体と「モノ」から見たドイツ語圏芸術人形劇の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of Art Puppetry in German-speaking Countries from the Perspective of the Body and Objects

研究代表者
山口　庸子（Yamaguchi, Yoko）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：００２７３２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：従来のモダニズム研究において、芸術人形劇ほとんど対象となってこなかった。本研究の目的は、芸術人形劇をめぐる言説や舞台実践が、ドイツ語圏モダニズムの中でどのような意義を持っていたか、また当時の身体観の変化や「人間」と「モノ」をめぐる関係の変容とどのような関連を持っていたのかを明らかにすることであった。コロナ禍で様々な制約があったが、本研究は、著書1件、査読付き論文2件、口頭発表8件（うち基調講演1件）、シンポジウム4件(うち3件を主催)など、大きな成果を挙げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでモダニズム研究において周縁化されてきた人形劇、仮面、オブジェクトなどを焦点化することで、モダニズム研究の新たな可能性を示したことは、本研究の重要な学術的貢献である。またモダニズムの人形劇と他芸術との関係、及び人形劇をめぐる東西文化の交流の諸相を明らかにすることもできた。愛知県芸術劇場および東京外国語大学の科研グループと協力し、一般公開の形で開催した4回のシンポジウムは、毎回平均して100名程度の参加者があった。関東や関西からも来場者があり、研究成果の社会への還元として大きな意義があったと考えている。

研究成果の概要（英文）：Art puppetry has rarely been the subject of traditional modernist research. This study aimed to clarify the significance of the discourses and stage practices surrounding art puppetry in German-speaking modernism and how they related to the changing views of the body at the time and to the changing relationship between ‘humans’ and ‘objects’. Despite the restrictions imposed due to the COVID-19 pandemic, the research achieved significant results, including two books, two papers (peer-reviewed), eight oral presentations (including one keynote speech), and four symposia (three of them organised by this researcher).

研究分野：ドイツ文学　舞踊史　身体文化

キーワード：人形劇　モダニズム　ドイツ文学　身体　舞踊　エドワード・ゴードン・クレイグ　アヴァンギャルド　モノ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

モダニズムの舞踊表象を研究する過程で、人形的身体への社会的注目を背景として、「人形劇ルネサンス」と呼ばれるような現象が存在することに気づいた。まず科研費「『超マリオネット』論再考」（2011-2013、基盤 C）を得て、当時世界的に有名だった演出家・演劇理論家エドワード・ゴードン・クレイグの「超マリオネット」の構想を、演劇改革、舞踊革命、人形劇ルネサンス、という三つのパラダイム変換の接点として身体史の観点から考察し、その背後に近代的な人間像の揺らぎがあることを明らかにした。次に「モダニズムの人形劇ルネサンス」（2014-2016、基盤 C）では、海外の資料館等においてドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇の資料を収集し、そのジャンル並びに文化越境性とグローバルな展開について論文を公表した。これらの研究の過程でかなりの量の関連資料を蓄積したものの、身体表象や人形表象に注目するだけでは、芸術人形劇というジャンルの固有性とその復権の要因をうまく取り出せないのではないかという疑念が大きくなった。その後、クレイグの仮面論を分析する過程で、身体と「モノ」という観点から分析できるのではないかと着想するに至った。

２．研究の目的

ドイツ語圏モダニズムの人形劇は、総合芸術を追求したブラン、東洋風の繊細な作品を生んだテシュナー、舞踊家でもあったトイバー＝アルプ、最初期の長編アニメ映画を製作したライニガーなど、多彩な人材を輩出した。本研究の目的は、これらの芸術人形劇の言説と芸術実践を、身体および「モノ」という観点から分析することであった。この時、これまで取り組んできた、モダニズムにおける文学、舞踊および身体文化の相互作用をめぐる研究は、有用な参照点となると思われた。本研究では、ドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇をめぐる言説や舞台実践が、ドイツ語圏モダニズムのなかでどのような意義を持ち、また当時の身体観の変化や「人間」と「モノ」の関係の変容とどのような関連を持っていたのかを明らかにし、モダニズム研究史の中で周縁化されてきた芸術人形劇の歴史的・社会的・文化史的文脈を再考した。

３．研究の方法

当初は、ドイツ語圏の博物館や資料館で海外調査を行うことを想定していたが、コロナ禍のため、購入した文献、写真、映像、スケッチ等、およびインターネットを通じて入手した各種の史料の分析を集中して行い、適宜発表していった。また 2023 年 3 月には、ウィーンやミュンヘンでようやく当初計画していた調査の一部を行うことができた。学術論文としては、エドワード・ゴードン・クレイグ、ゾフィー・トイバー＝アルプ、リヒャルト・テシュナー、ロッテ・ライニガーらの人形劇や人形アニメーション、およびメアリー・ヴィグマンらの仮面舞踊についての分析から、西洋近代で理想とされた自律した主体に代わって、他者やモノとの関係に絡めとられた主体の表現が浮き彫りになった。研究で得られた成果は、学術誌やシンポジウムにおいて発表し、多くのフィードバックを得ることができた。

４．研究成果

本研究の主要な研究成果としては、著書 2 件、論文（査読有）2 件、口頭発表 8 件（うち基調講演 1 件)、シンポジウム 4 件(このうち 3 件を主催)、を挙げることができる。

【著書】2 件

ともに、国際会議および独文学会全国学会での発表を元にした共著である。担当部分では、それぞれ、モダニズムにおける仮面の復権および、「動き」の概念について論じた。

1. Muroi, Yoshiyuki (Hrsg.), *Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo*, München/Tokio, iudicium 2020. (担当部分：„Die Maske als Medium der Gemeinschaftlichkeit. Die Rezeption der fremden Masken im Werk von Edward Gordon Craig, Lothar Schreyer und Mary Wigman“, S. 328-335.) https://www.iudicium.de/katalog/86205-331.pdf

2. 小松原由理編、『アヴァンギャルドの運動表象』、日本独文学会研究叢書 149、一般社団法人日本独文学会、2022 年、（担当部分： 山口庸子、「表現舞踊における『動き』の概念―イサドラ・ダンカン、メアリー・ヴィグマン、ヴァレスカ・ゲルト―」、24 – 39 頁）https://www.jgg.jp/mod/book/tool/print/index.php?id=46&chapterid=30　招待有。

【査読付き論文】2 件（その他 4 件）

全国学会の学会誌である『ドイツ文学』および『舞踊學』に、それぞれ査読論文を 1 件ずつ掲載することができた。その他、4 件の研究紹介・シンポジウム報告がある。

1.山口庸子、「表現舞踊のジャポニスム―ヴィグマンの能受容とヴィ・マギトの日本風仮面舞踊をめぐって」、『舞踊學』（舞踊学会）43、2020 年、38 – 46 頁。査読有。本論文は、表現舞踊の代表的舞踊家であるヴィグマンの能受容と、その弟子のマギトの日本風仮面舞踊について、新発見

の資料を示しつつ、初めて論じた。ヴィグマンの能受容では、能面というモノ及びその舞踊におけるその操作が重要な役割を果たしており、「中間表情」の機能が理解されていたことを指摘した。マギトにおいては、日本旅行記、学術書、写真、映像などが、舞踊におけるジャポニスムのリソースになっていたことを指摘した。
2.山口庸子、「ドイツ語圏の芸術人形劇における異文化受容―クレイグ、トイバー＝アルプ、テシュナー」、『ドイツ文学』（日本独文学会）166、2023 年、126‐140 頁。査読有。本論文では、モダニズムの芸術人形劇が、西欧近代的な人間像に対するオルターナティヴな人間像を提示していることを指摘し、非西欧の仮面・人形や人形劇のインパクトを、ジャンル横断的に論じた。

【シンポジウム】4 件（うち 3 件を主催）
　本科研が、愛知県芸術劇場及び東京外国語大学の科研グループとともに主催した「ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム」は、一般公開の形で行い、大きな反響を呼んだ。平均して毎回 100 名程度の参加があり、特に『ダンスと人形』のシンポジウムは好評で、120 名以上の参加を得、研究成果の社会的還元に大きく貢献したと考えている。

1．ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『踊る女性の身体：ドイツ・イタリア・ロシアのアヴァンギャルド舞踊』、2021 年 3 月 27 日。企画・発表者として参加したこのシンポジウムでは、「ドイツ表現舞踊における仮面と女性」として発表し、モダンダンスにおける踊る身体と仮面というモノとの関係性を論じた。
2.『身体のブリコラージュ―アヴァンギャルドは〈他者〉の身体をいかに引用したか』、2022 年 3 月 19 日。本シンポジウムを主催するとともに、口頭発表「モダンダンスと芸術人形劇における〈他者〉の引用」において、非西欧の仮面や人形の表象および、その作り方や扱い方が、西欧の芸術人形劇とモダンダンスに与えた影響について論じた。
3．　ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『ダンスと人形―アヴァンギャルドはモノと動きをどのように捉えていたか』、2023 年 3 月 18 日。本シンポジウムを主催するとともに、「モダンダンス、芸術人形劇、アニメーション―ロッテ・ライニガーをめぐって」と題した口頭発表を行い、モダンダンスと芸術人形劇、およびロッテ・ライニガーの影絵人形アニメーションの間のネットワークについて報告した。
4．ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『踊る文字―アヴァンギャルドが見た文字と身体』、2024 年 3 月 9 日。本シンポジウムを主催するとともに、「趣旨説明」として、アヴァンギャルドにおける文字の身体化・物質化、および動く／踊る身体の文字化・記号化という二つの方向性を示した。

【口頭発表】8 件
【シンポジウム】の項で述べた以外の 4 件の発表は以下のようである。特に、『現代人形劇 100 年』をテーマとする日本人形玩具学会の研究発表大会に基調講演者として招待されたことは、本科研の学術的意義を示していると考えている。

1．山口庸子、「ドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇―リヒャルト・テシュナーを例として」、日本独文学会秋季研究発表会、オンライン、2020 年 11 月 22 日。査読有。
2．山口庸子、「表現舞踊における「動き」の概念」、シンポジウム「アヴァンギャルドの運動表象」、日本独文学会春季研究発表会、2021 年 6 月 5 日、オンライン。招待有・査読有。
3．山口庸子、「モダンダンスの仮面舞踊におけるジャポニスムとジェンダー」、シンポジウム『20 世紀初期の音楽と舞踊におけるジャポニスム・オリエンタリスム―女性の表象と身体―』、科研「1890 年代から 1930 年代のドイツ・オーストリアにおける音楽のジャポニスム」（若手研究：21K12871　代表：釘宮貴子）主催、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ、2022 年 11 月 5 日。招待有。
4．山口庸子、「エドワード・ゴードン・クレイグの『超マリオネット』と日本の人形劇」、基調講演、日本人形玩具学会第 35 回研究発表大会（大会テーマ『現代人形劇 100 年』）、日本大学、2023 年 10 月 21 日。招待有。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 山口庸子	４．巻 49
２．論文標題 トピックス「愛知県芸術劇場　ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム 『ダンスと人形』」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 表象文化論学会ニューズレター、REPRE	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口庸子	４．巻 166
２．論文標題 ドイツ語圏の芸術人形劇における異文化受容―クレイグ、トイバー＝アルプ、テシュナー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『ドイツ文学』	６．最初と最後の頁 126-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口庸子	４．巻 46
２．論文標題 トピックス「愛知県芸術劇場　ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム 『身体のブリコラージュ――アヴァンギャルドは〈他者〉の身体をいかに引用したか』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 表象文化論学会ニューズレター、REPRE	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口庸子	４．巻 3
２．論文標題 文学、ダンス、ジェンダー―学際的研究への歩み	５．発行年 2021年
３．雑誌名 GRL（名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリー）	６．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口庸子	4．巻 43
2．論文標題 シンポジウム報告「愛知県芸術劇場　ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム　『踊る女性の身体：ドイツ・イタリア・ロシアのアヴァンギャルド舞踊』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 表象文化論学会ニューズレター、REPRE	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口庸子	4．巻 43
2．論文標題 表現舞踊のジャポニスム―ヴィグマンの能受容とヴィ・マギトの日本風仮面舞踊をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 舞踊學	6．最初と最後の頁 38-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11235/buyougaku.2020.43_38	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山口庸子
2．発表標題 趣旨説明
3．学会等名 ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『踊る文字―アヴァンギャルドが見た文字と身体』
4．発表年 2024年

1．発表者名 山口庸子
2．発表標題 モダンダンス、芸術人形劇、アニメーション ―ロッテ・ライニガーをめぐって―
3．学会等名 ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『ダンスと人形』
4．発表年 2023年

１．発表者名 山口庸子
２．発表標題 エドワード・ゴードン・クレイグの「超マリオネット」と日本の人形劇
３．学会等名 日本人形玩具学会第35回研究発表大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口庸子
２．発表標題 モダンダンスの仮面舞踊におけるジャポニスムとジェンダー
３．学会等名 シンポジウム『20世紀初期の音楽と舞踊におけるジャポニスム・オリエンタリスム－女性の表象と身体―』（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口庸子
２．発表標題 モダンダンスと芸術人形劇における〈他者〉の引用
３．学会等名 ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『身体のブリコラージュ』
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口庸子
２．発表標題 表現舞踊における「動き」の概念
３．学会等名 シンポジウム「アヴァンギャルドの運動表象」、日本独文学会春季研究発表会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口庸子
２．発表標題 ドイツ表現舞踊における仮面と女性
３．学会等名 ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『踊る女性の身体：ドイツ・イタリア・ロシアのアヴァンギャルド舞踊』
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口庸子
２．発表標題 ドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇―リヒャルト・テシュナーを例として
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 小松原由理編、小松原由理、柴田隆子、西岡あかね、山口庸子、和田忠彦著	４．発行年 2022年
２．出版社 一般社団法人日本独文学会	５．総ページ数 79
３．書名 アヴァンギャルドの運動表象	

１．著者名 Muroi, Yoshiyuki (Hrsg.)　他著者113名	４．発行年 2020年
２．出版社 iudicium	５．総ページ数 1012
３．書名 Einheit in der Vielfalt?	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関